

(様式 5)

令和元年度秋田大学研究者海外派遣事業 帰国報告書

令和 2年 4月 10日

所属・職名：教育文化学部・准教授

氏名：瀬尾 知子

派遣期間：令和元年 9月 15日～令和 2年 3月 12日

派遣研究機関名：英文 University of Georgia

：和文 ジョージア大学

研究課題：幼児期の食育と社会情動的スキルの発達

～日本とアメリカの子どもの食事場面の比較研究～

○研究概要（2000字程度）

1. 研究目的

社会情動的スキルの発達に関するこれまでの研究から、社会情動的スキルが高い子どもは、大人になってからのより良好な生活を送ることができること、認知的スキルと社会情動的スキルは相互に作用すること、特に幼児期から青年期にかけて発達することが明らかになっており、近年、社会情動的スキルの発達に関する研究が熱心に行われている。

社会情動的スキルは、当人の性格から成長していくものであると同時に、その発揮と成長は、家庭や友人関係、とりわけ幼児教育を含む学校教育を通して伸びていくことが示されており、社会情動的スキルは教育可能であることが明らかになっている。しかし、園での食事場面を通してどのように社会情動的スキルが発達するのかが明らかになっていない。現在、ほとんどの子どもが園での生活を経験しており、園での食事を経験している。食事場面は、遊び場面とは異なり、一定時間、その場にとどまる（座っている）必要がある。また、食事は単に健康を維持し栄養を満たすだけでなく、他者と食べることを通して、人とのかかわりや、その文化の中での食事のルールを身に付けるといった社会性を身に付ける営みでもある。

本調査では、子どもが園での食を通してどのように社会情動的スキルを発達させるのかを日本とアメリカの比較研究から明らかにすることを目的とする。そして本調査から、文化的な背景の違いに応じた、園での食事場面における保育者の援助について考察する。

2. 研究方法

本研究は、Video-cue multivocal method(Tobin, Wu, & Davidson, 1989)の研究方法を援用する。日本とアメリカの園での食事場面をまとめた 20 分のビデオを作成し、そのビデオをインタビューのきっかけとして用いる。20 分に編集されたビデオをもとに、クラス担任保育者、関

(様式 5)

係者等にインタビューを実施する。そして、食事場面の観察データと保育者へのインタビュー調査から、子どもの社会情動的スキルの発達について、質的分析と解釈を行う。

2-1 アメリカにおける調査

2-1-1：日本での食事場面の観察及び撮影・編集

はじめに、アメリカでインタビュー調査を実施するために、2019年6月から8月にかけて、日本における園での食事場面(3, 4歳児)の観察及びビデオ撮影を実施した。ビデオによる撮影は、食事の準備から後片付けまでを含めて行った。

次に、園での食事場面のビデオデータから、「模倣」、「身体接触」、「保育者の介入」に焦点をあてて、約20分間の映像に編集した。

2-1-2：アメリカでの食事場面の観察及び撮影・編集

2020年1月から2月にかけて、アメリカの園での食事場面(3, 4歳児)の観察及びビデオ撮影を実施した。

手続きは2-1-1に準拠した。

2-1-3：インタビュー調査

日本とアメリカの食事場面のビデオを用いて、2020年2月から3月にかけて、インタビュー調査(クラス担任保育者3名、園長1名、大学で幼児教育を専門としている教員3名)を実施した。

インタビュー調査では、ビデオを視聴しながら、「なぜ、あなたはこの場面でこのような対応をしたのか」「あなたが、このクラスの保育者だったらどうしますか」「この実践についてどう思いますか」等の質問を行った。

2-2 日本における調査

2-1と同様の手続きを行い、2020年6月から8月にかけて日本における園での食事場面(3, 4歳児)の観察及びビデオ撮影を行い、2020年10月から12月にかけて約20分間に編集された日本とアメリカのビデオもとに、クラス担任保育者、同園の保育者や園長にインタビュー調査を実施する。

3. 研究結果

3-1 食べさせるという行為

日本の園での食事場面では、なかなか食が進まない子どもに対して、保育者が食べさせる行為が頻繁に行われる。「このビデオを見て、驚いたところはありますか」という質問に対して、インタビュー調査を実施したアメリカの保育者全員が、「こちらでは、3歳児4歳児に対して、直接食べさせる行為は決してしない、その行為をするのは乳児期の自分自身で食べることがで

(様式 5)

きない子どもに対してだけです」と言い、保育者が食べさせるという行為に言及していた。

食べさせるという行為は、後年のコミュニケーションを支える社会的な土壌となる（川田, 2013）ことが指摘されており、単に栄養摂取を目的としているわけではない。日本での保育者が食べさせるという行為は、単に、残さず食べることを促しているだけでなく、「甘え」を許容する行為でもありととらえることができる。土居(1973)は、「甘え」を「他の人から心配や助けを招くように行動すること」と定義している。日本において幼児期に重要な発達課題は、自立ではなく依存を通して、孤独と寂しさをいかに乗り越えるか（Caudill & Plath, 1966）であり、園での食事場面においても、先生を呼び、先生に食べさせてもらうという行為は、他の子どもと関わりたい、自分にも注目してほしいという「甘え」の表れだといえる。

食べさせるという行為は、人とつながってほしい願望を保育者が受け止め、グループの一員としてかかわるための、足場掛けとしての役割を果たしていると言えるだろう。

3-2 待つということ

日本の園での食事場面では、「いただきます」のあいさつの後に、一斉に食べはじめ、「ごちそうさま」のあいさつの後に、一斉に片付けをする。日本の食事場面のビデオを視聴した後に、日本の園の食事場面に関する感想を語る場面で、アメリカの多くの保育者、研究者が、食事を食べ終わっても、全員が食べ終わるまで待つことについて言及していた。日本の園でとられているアプローチは、子どもたちが参加したいように環境を整えている（Lois, 1997）ことを指摘している。今回の食事場面でも、ある子どもは食事の時に手を合わせて、ある子どもは手を合わせずに「いただきます」や「ごちそうさま」の挨拶をしている。ここでは、挨拶をしないからと言って、問題のある子どもといったレッテルを張られることはなく、クラスの一員として、含まれている。そして、クラスの一員として、食事の時間と空間を共有することを求められる。日本では、きちんとした状況と打ち解けた状況、異なる時間というように、刻々と使い分けが求められる（林・トービン, 2019）。つまり、食事場面では、挨拶により食事の時間が区切られ、その時間は、お互いに、相手に自分を合わせることをしながら、他者と食事時間を共有することが求められる。

食事といった、他の活動とは区切られた時間や状況の中で、忍耐力や他者と同調すること学んでいると言えるだろう。

3-3 結論

本研究では、Video-cue multivocal method を用いて、日本とアメリカの食事場面のビデオ編集をツールとして、インタビュー調査を行い、園での食事場面における子どもの社会情動スキルがどのように発達するのかを検討した。その結果、日本での食事場面では、保育者の食べさせるという行為と、全員が食べ終わるまで待つという行為は、忍耐力や自己抑制、他者との協働といった社会情動的スキルを発達させるうえで重要な役割を果たしていることが示唆された。

(様式 5)

今後は、日本で、アメリカと日本の園での食事場面の映像を編集したものをもとにインタビュー調査を行い、さらに文化的な背景の違いに応じた食事場面での社会情動的スキルの発達に関する分析を進めていきたい。

○海外派遣事業中の研究等活動が、帰国後の研究・教育等の活動にどのように反映される見込みか概括ください。

社会情動的スキルの発達に関して、熱心に研究が行われているが、子どもの園での食事場면을二国間で比較する研究は類を見ない。今後、さらに日本での研究を進めることで、日本の子どもの社会情動的スキルを上昇させるための、環境整備や教育的関わりに関する有用なヒントを得ることが可能となり、保育・教育現場への還元ができると考えている。

さらに、派遣先大学との連携を継続的にやり、共同研究など研究に寄与していきたい。さらに、Video-cue multivocal method の開発者の Tobin 教授から直接指導をいただいた経験をもとに、学生の研究活動に反映させ、学生の教育活動にも寄与していきたい。

○研究期間全般にわたる感想

ジョージア大学は、全米を代表する最古かつ最大の高等教育機関の一つであり、1785年にアメリカ合衆国最初の州立大学として設立されたマンモス大学として知られています。そして、ジョージア大学は、図書館も最大規模の蔵書数を誇っており、研究を行う環境が十分に整っていました。

今回、受け入れ世話人の Joseph J. Tobin 教授や関係する教員の方々からは懇切丁寧なご指導、ご助言をいただきました。受け入れをしていただいた Department of Educational Theory and Practice には、私のほかに 2 名の客員研究員がおり、定期的に、Faculty Staff とのミーティングをしていただきました。また、学部や大学院の授業に参加させていただいたり、郊外授業に参加させていただいたり、多くの学びの機会を与えていただきました。さらに、図書館利用、印刷機の利用など研究環境にも多大なご配慮をいただいたことにより、滞在期間の研究を極めて円滑に進めることができました。Tobin 教授はじめ、ジョージア大学の関係者の皆様には多大なるご支援をいただきました。

また、今回のアメリカの園での観察および、インタビュー調査は、ジョージア大学附属 McPhaul Center でさせていただきました。現地到着後から、研究倫理審査の手続きを行い、保護者の方々、園長先生はじめ、担当の先生方、また大学で幼児教育を専門としている先生方から研究参加への同意をいただき、2020年1月から3月までの間、観察およびビデオ撮影、インタビュー調査を行いました。個人情報、研究倫理に厳しい、アメリカで研究をするためには多くの手続きがあり、困難も伴いましたが、園長先生はじめ、園関係者、研究者、保護者の方々、そして園児のご協力のもと、充実した研究を行うことができました。

(様式 5)

このような国際比較研究は、じっくりと時間をかけて多くの手続きを踏む必要があるため、本事業のような長期間の滞在でなければ成し得なかったことと考えています。今回、長期間在外研究を行うにあたり、快く送り出してくださった教育文化学部の先生方、出国前の手続きに迅速に対応していただいた事務方のみなさま、この場をお借りして、深く御礼を申し上げます。今後、アメリカでの研究生生活で得た成果を大学ならびに学部での教育・研究に最大限還元していきたいと考えております。



McPhaul Center のランチタイムの様子



インタビュー調査の様子

※報告書は、高等教育グローバルセンター刊行物（Web サイト含む）に公開（次ページからの評価は除く）を予定しておりますので、電子データをご提出ください。